# 御伽草子「鉢かづき」の変装趣向とその原拠

鈴木弘道*

## （一）

従来、御伽草子「鉢かづき」における変装の趣向や物語の原拠につき、詳細な考察を試みた研究はあまり見られないので、ここに、私はかなり大胆な試論を展開してみようと思う。

「鉢かづき」は、御伽草子「うばかは」「花よの姫」などとともにいわゆる姥皮系説話に所属するもので、天野信景の随筆「塩尻」(一)巻之三十九に、

○或問世俗蒙昧の女童などの真徳丸梅若丸鉢かつきなといふ草紙あり是等も出所有事にやと答ふ真徳丸は河内国山畑村の長者の子なり鉢かつき事は同国寝屋村の長者か女なり是等の事河州紀とて五巻の書あり夫にはあり梅若か事は梨園温故といふ書に見たりき（六三六頁）

とあるから、当時、(二)河内国寝屋村の長者の女を主人公とした「鉢かづき」の伝説が流布していたらしく、すでに市古貞次博士著「中世小説の研究」には、「鉢かづき」「うばかは」「花よの姫」が地方の説話・伝説と関係のある物語であり、

おそらく現在の民間伝承そのままではなくても、類似の民間説話が当時地方に行はれてゐて、それが草子化せられたものと、この三篇に就いては考へるのが妥当であらう。(四)

と説かれている。しかし、松本隆信氏は、(五)「鉢かづき」の鉢は「うばかは」の姥皮に代るものであっても、やや趣向が異なる点につき、この趣向が草子の作者の創案になるものか、民間伝承によるものかと疑われ、また、右の河内国寝屋村の長者伝説の内容を不明とされ、それゆえに、それが「鉢かづき」の原拠であることにすこぶる懐疑的態度を示しておられる。さらに、松本氏は、

文献によって流布した話がある土地に土着して、伝説化する過程もしばしばあることを考慮しなければならないであろう。

と述べ、関敬吾氏編「日本昔話集成」から「鉢かづき」型の昔話を四例引用されて、それらのいずれもが、文献として成立した「鉢かづき」の影響を受けて語られたものであり、鉢をかずくという趣向が民間伝承によって作られたであろうことを強く否定されている。

## （二）

「塩尻」に指摘された河内国寝屋村の長者伝説に類するとおぼしき文献は、現在、「寝屋川市誌」の中に飜刻されて収められているが、その内容は、日本古典文学全集「御伽草子集」所収「鉢かづき」の冒頭の頭注に、

『北河内郡史蹟史話』によると、大阪府寝屋川市寝屋の伝説として、「長者備中守藤原実高が、奸悪な後妻浅路といふものの言にまよひ、先妻の生んだ初瀬姫を虐遇し、家産は全く傾き尽した姫は大和国長谷観音の仏力によって救はれ、京都なる山陰中納言の室となった」と伝えられる。（七六頁）

* 国文学研究室（1975年9月25日受理）

とあるのと同様で、原本は現在、旧水本村役場から寝屋川市役所に移され、七巻の写本として蔵されている。(心)その体裁を略記すると、次の通りである。

七巻ともに美濃紙の袋綴で、表紙・裏表紙も同質料紙であり、題簽はなく、内題もないが、それぞれの表紙中央に直接、「河内国交野郡寝屋長者鉢記　壱」「交野郡寝屋長者鉢記　二」「交野郡寝屋長者鉢記　三」「河内交野郡寝屋長者鉢記　四」「かたの郡ねや長者鉢記　五」「交野郡寝屋長者鉢記　六」「交野郡寝屋長者鉢記　大尾」と記され、各巻いずれも「交野郡」または「かたの郡」までを一行書にして、あとの文章を改行し、左下隅にそれぞれ「壱」「二」「三」「四」「五」「六」「大尾」と記している。写本の大きさは、縦二四・六糎、横一六・九糎で、各巻ともに遊紙なく、表紙一丁と裏表紙一丁以外は本文墨付として、巻一以下、それぞれ二〇丁、二四丁、二二丁・二〇丁、二四丁、二四丁、二三丁が使用されている。各巻は、一面六行書で、一行字詰は約一一字から一四字ぐらいである。各巻の綴糸の上には表紙と同質の料紙が貼られ、蔵書印はない。虫損は僅少で、筆跡はやや乱暴とも思われるほどの男性的な雄渾さが感じられるが、さして達筆ではないようである。巻七終末二三ウにある奥書には、

右は萬治二年八月絵本に印形有て松会堂蔵板也を書写し畢ぬ萬治迄年数二百年余に成り萬治より明治四迄百八十九年余に成と前後には三百八十九年余に相成よし

とあるが、祖本とされたらしい「萬治二年八月絵本に印形有て松会堂蔵板」なる板本は、松本隆信氏「御伽草子本の本文について（二）―鉢かづきの草子―」(七)に取扱われた「万治二年松会刊絵入本（東京教育大学図書館蔵）」の本文と大差が見られるから、この絵入本とも明らかに異なっている。右の奥書によると、祖本は「絵本に印形有」るものらしいが、この市役所本には、巻二の六オに小さな扇子の一部を描いた絵があるのみで、祖本の「絵」は書写の際にほとんど省略されたものとも考えられる。というのは、扇子の絵には、その扇子の紙に当たる箇所に、

暁の別れも　しらぬ鳥の音は」何のつらさに」啼きはじめけん」
行平」(八)

と記され、また、扇子の紙の上部に「此処本金也」という説明文が施されており、この説明文は、墨書では、本金を使用した祖本のままの絵を描くことが不可能なために、施された一種の注であって、祖本に華麗な色彩の挿絵が描かれていたであろうことを想像させるものである。このことから、祖本は他の箇所にも挿絵のある「絵本」であったろうことが推定される。

市役所本の内容は、現在する「鉢かづき」の伝本の内容と比較して、その後半は割合に類似しているが、前半にはかなり大きな相異が認められ、分量も多い。一方、横山重氏は「室町時代物語集　第三」の「解題」において、万治二年松会刊絵入本には、その祖本となった別板が存在したと想定すべきことを述べておられるが、その別板がこの市役所本の祖本すなわち「萬治二年八月絵本に印形有て松会堂蔵板」なる板本であるとは、市役所本の本文・内容から考えて、必ずしも即断はできないようである。ただ、「寝屋川市誌」（七五四頁）によると、たとえば、現在、寝屋川市大字寝屋九〇六にある西蓮寺境内に観音堂があり、そこに安置されている、高さ一・二二米の木像十一面観音や、大字寝屋九〇五にある正法寺境内に見られる、高さ約八九糎の石の地蔵尊は、寝屋長者の信仰した仏像と伝えられ、特に後者は、元禄二年（一六八九）に制作されたものであるが、これらの仏像がともに寝屋長者伝説と結合され、また、市役所本中にも取挙げられていることよりして、この伝説は、江戸時代以前よりかなり寝屋地方に強く根を張っていたことが想像される。その伝説の原初形態が市役所本の祖本と一

致するとは、必ずしも考えられず、その祖本はかなり伝説を潤色していることが予想されるけれども、少なくとも、伝説内容の根幹は市役所本と大差がなかったものではあるまいか。したがって前述のごとく、「鉢かづき」型の昔話が他に四例あるにしても、やはり市役所本およびその祖本の内容の基礎となった、民間伝承としての寝屋長者伝説こそ御伽草子「鉢かづき」の原拠と見るべき可能性が大であると私は思うのである。この点、鉢をかずくという趣向が民間伝承によって考え出されたことを否定され、

私は、「鉢かづきの草子」が民間伝承としての姥皮型の昔話を素材として作られたことは疑いがないであろうが、鉢をかづ(ママ)かせるという趣向は、あるいは草子作者の創案であって、鉢かづき型の幾つかの昔話は、文献として流布した草子の方から影響を受けたのではないかと考えるのである。

と述べられた松本氏の御意見は俄に賛成しがたいが、さらに、右の私見を裏付け得る徴証の一端については、後述するつもりである。

（三）

鉢をかずくことによる変装の経緯を、御伽草子「鉢かづき」について見ると、姫君の母が臨終に際して、姫君の頭にその肩が隠れるほど深く鉢をかずかせ、

さしも草深くぞ頼む観世音誓のままにいたゞかせぬる。(九)

と詠歌したが、歌の内容あるいは「室町時代物語集」第三所収の奈良絵本等によると、姫君は観音のお告げによって誕生し、母の臨終の時に鉢をかずかせよという観音の示現があったことがわかる。ちなみに市役所本も、初瀬寺観音を深く信仰していた夫婦の夢に、観音のお告げがあったことになっている。いずれにしても、鉢をかずくことは、顔を隠すための変装にほかならず、これによって、時機到来まで姫君の貞操を守らせることにもなるわけである。

それでは、なぜ殊更に「鉢」が変装用具として選ばれたのであろうか。松本氏は、徒然草の仁和寺法師の鼎かずきの話から思いついたのだろうかとされた野村八良博士の説(一〇)に対して、「何とも言えない」と軽く感想を述べ、

「鉢かづきの草子」の板本の挿絵には、盃型の鉢を冠った姫の姿が沢山描かれているが、その姫の姿は非常に印象的である。板本の「花世の姫」では、本文では姫は姥皮を着るのであるが、その場面の挿絵を見ると姫は姥皮を着た姿になっておらず、元の姿の儘である。おそらく姥皮を着た姿というのは具体的に想像しにくかったと思われる。それに較べて鉢をかずいた姿は絵になり易いという事情がこのような趣向を生み出した理由ではなかったかと考えるのである。

と説かれたが、「絵になり易い」ということが、はたして、鉢をかずく趣向に先行する条件であろうか。私は必ずしもそうは考えたくない。絵は、本文の内容がまず決定された後にこそ描かれるべきものでこの点、松本氏説には全く従うことができないのである。

かつて、高崎正秀博士はその著「物語文学序説」の「皿屋敷説話の研究—宇津保物語『俊蔭』成立論への前提—」において、農村の富を左右する水霊・水神としての河童の頭上にある皿には霊力が秘められていると、昔から信じられていたと説かれる折口信夫博士説(一一)を引合いにして（三七〇頁）、近江国（現、米原市）筑摩神社に伝わる奇祭、鍋冠祭の鍋が神聖なるものと考えられる（三七一頁）点、河童の皿も鍋も同じく神霊の容器であると説かれ、さらに、「頭の皿」は「頭の鉢」とも言い、動物にとって最も大切な、そして神聖であるべき頭蓋骨を指す事実、また、蝸牛・田螺などすべての円い巻貝が、古くより「つぶ」「つぼ」「つび」「つぶる」「つぶれ」などと呼ばれ、水を汲む「壺」

も螺旋状に土をこねて作ったところから「つぼ」であり、水を汲む「瓢」も「つぶる」「つぼけ」と呼ぶ地方があり、頭を「つむり」というのも「瓢」の転であること等について説かれた柳田国男氏の「蝸牛考」の一部などを取挙げられて（三七六頁）、結局、鉢・皿・鍋・水甕・壺などは、元来、水仕女がそれらを頭上に置いて、水を運ぶための神霊の容器として用いられたもので、水を入れるための容器を運搬する姿は、古代女性生活の一端を示すものでもあろうと述べておられる（三七八・三七九頁）。以下、私はこの所説をさらに深く追究しようと思う。

## （四）

さて、柳田氏説に見える円い巻具の呼称の一つである「つび」という語は、たとえば、狩谷棭斎著「箋注倭名類聚抄　上」の「玉門」の項に、

房内経云、玉門、女陰名也、○按謂二女陰一爲二玉門一、見下外台秘要引二素女経一及病源候論婦人帯下候上、　楊氏漢語抄云、屎　通鼻、今案俗人或曰二朱門一、並未レ詳、○各本屎作レ屎、按新撰字鏡云、屎音朱、久保、久保亦女陰之名、見二日本霊異記訓釈一、則屎爲二屎字之譌一無レ疑、今改、「又按屎蓋従レ尸従二朱門之朱一、皇国会意字、恐非二漢語一也、」朱門見二鉄槌伝一、按義楚六帖引二広弘明集一、戴二道士張陵云、男女行二朱門玉柱一、然則朱門亦非二国俗之語一、但今本広弘明集、不レ載二所レ引文一、　（一八一頁）

とあること、その他、古今著聞集巻第十六「興言利口　第廿五の五四四番」外宮権禰宜度会盛広妻に筑紫女を請ふ事」に、

つびはつくしつびとて、第一の物といふなり。

とあることなどにより、古くから、女陰のことをもいう語であったことがわかる。おそらく、女陰の腟が円い巻具と類似するところから、いずれもが「つび」と呼ばれたものではあるまいか。ところが、中野栄三氏著「陰名語彙」によると、「つび」以外に「つびたり」「壺」「鉢」「鍋」なども女陰の呼名、またはその比喩として使用されていたらしい。もっとも、「つびたり」は古語であろうが、「壺」「鉢」「鍋」は、たとえば鈴木勝忠氏編「雑俳語辞典」や日本大辞典刊行会編「日本国語大辞典」のそれぞれの項や「あらばち」（新鉢）の項に種々の近世の用例があって、少なくとも近世にはこれらの語が女陰のこと、またはその比喩として使用されていたことが明らかで、これはやはり形態上の類似によったものではないかと考えられる。しかも、東条操氏編「全国方言辞典」「標準語引　分類方言辞典」によると、女陰を「つび」と呼ぶ地方もかなりあって、この古語が現在まで生き続けて来ていることを示しているから、もしかすると、近世以前においても、「壺」「鉢」「鍋」が女陰またはその比喩を表わす言語として使用されたかも知れない。ちなみに、西郷信綱氏の近著「古事記注釈」第一巻の「みほと炙かえて」の解説中に、

ホトは女陰のこと。地形にかんし「畝火山の美富登」などともいった。豊後風土記海部郡穂門郷の名も、おそらくその地形に由来する。フトコロ（懐）のフトとホトとは同語であろう。俗にフトコロのことをホトコロという。腹ふとく口のすぼまった素焼きの土器ホトギ（缶）のホトも同じであろう。が、語の由来は明らかでない。女陰のことをまたクボともツビともいった（名義抄）。クボはクボム、ツビはツボムと関係がある。（一五一頁）

とあり、右の「ホトギ（缶）」は、要するにいわゆる「壺」のことであるから、「壺」も女陰と関係のあるものとして一般に考えられていたに違いない。「鉢」は、前掲「全国方言辞典」によると、長崎県五島で「まんこ」と呼ぶらしいが、前掲「陰名語彙」に「満紅【まんこう】」の項があり、その解説を考慮すると、「鉢」は女陰またはその比喩を表わす語として、近世以前より使用されていたのではないかと推定される。文献にその用例が見当たらないことに一抹の不安はあるが

右の方言によって立証されるのではあるまいか。なお、右の「陰名語彙」には、「陰名考」に見える「まんこ」の「美斗」語源説が引かれているが、これに関して思い当たることは、古事記上巻の初めに見える「美斗能麻具波比」（圏点筆者）の語で、西郷氏の前掲著書には、この語につき、

交接のことをいう。マグハヒがすでに交合の意であるのに、ミトノとあるのは、聖婚だからである。ミトを御戸すなわち寝所の意とする説が多くおこなわれているが、このトは陰部をさすと見る方がいい（前段「オホトノヂ」の項参照）。寝所の方は、次に出てくるクミドがそれにあたる。スサノヲと奇稲田姫、「ともに遘合して、児大己貴神を生む」（神代紀上）とある「遘合」を、私記乙本にミトアハシテとも訓んでいるのは、ミトが寝所でないことを示す。スサノヲと奇稲田姫との結婚も、何れそのくだりで見るように聖婚であった。（一一〇・一一一頁）

と説かれ、さらに、「意富斗能地神、大斗乃弁神」については、

地と弁は、それぞれ男と女であることを示す。ヂは前出のヒコヂやヲヂのヂに同じ、べは、記紀に荒川刀辺、刈幡刀弁など女の名の語尾に多い。それはおそらくメ（女）と関係する。さてこの両神、紀には大戸之道・大苫辺、大戸摩彦・大戸摩姫、大富道・大富辺などと出ているが、オホトの部分は記紀ともに動いていないから、オホトのトの一語が急所であることが分る。そして従来、このトは立ち処、隠処などのトで所または場所の意とされ、宣長などもこの二神は「彼地と成べき物の凝成て、国処の成れる由」をあらわすといっているのだが、一面的ではないかと思う。意富斗の斗は甲類のトであるが、甲類のトには処のほか「瀬戸」「明石の門」などのトがあり、後にいうミトノマグハヒとかトツグとかのトがこれである。かくして、このオホトは男女の陰部をたたえたものとする説をも（大系本書紀）、当然考慮しなければならないはずである。こうした考えかたを最初にうち出したのは平田篤胤で、次のようにいっている、「大斗乃弁神の斗は始めて男女の形の別り給へる意をもて称奉れりと所思ゆ。其は角機・活機と申す名は、御身の角具美活動くべき状に成り給ふより申し、面足・惶根とは、御形の成満ひ坐るもて名け奉れるにて、其間なる大戸は、彼処（陰処）にかけて負せ奉れる御名なることを思ひ定むべし」（古史伝）と。（下略）（九二・九三頁）

という解説があるが、「陰名考」の語源説については、今後、なお検討すべきであろう。（一四）

かくて、元来、神霊の容器として用いられた鉢・皿・鍋・水甕・壺は、いずれも、別に女陰を象徴するものでもあったと考えることができるであろう。

## （五）

一方、古代においては、性器、特に女陰は男根よりも神秘性・神聖性があるものと信じられていたが、最近、吉野裕子氏はその著「日本古代呪術」の「第二章　女陰考—呪術における女陰」の中で、

日本神話の今で女陰に関し印象的な箇処が三つある。その第一は伊邪那美命が、多くの国土や神神を生んだあと、火の神を産んで陰を灼かれ亡くなったという処。この話をきっかけに神話は大きな展開をする。第二は須佐之男命の暴力に驚き、天照大神の織女（『書紀』の別伝によれば大神の妹、又は大神自身）が陰を梭で衝いて亡くなり、それが因で大神が岩戸がくれするという條。第三は天孫降臨に際し、その行手を阻む猿田彦に対し、天鈿女がその交渉に当り、その際、陰を露して嘲笑い、これを降した、という話。（中略）また天鈿女の陰の露出は、猿田彦に出会った時だけ

でなく、天照大神の岩戸がくれの場合の踊りにもみられる。（七四・七五頁）

と述べ、女陰の損傷が女神の死因となっていることは、女陰が信仰の対象であったことを推測させるものであり、また、女陰の露出が重大な局面に際して行なわれていることは、それが、信仰に基づく呪術であったことを示すものであると説かれた（七八頁―八〇頁）。まことに、女陰には霊力・呪力があると信じられていたことは、今日でも性的な文句が一種の呪文として相手を罵倒したり嘲弄したりすることに用いられる場合があることを考えても納得し得るのである。[五]

このような女陰崇拝は、言うまでもなく、女陰が男根を挿入する容器であり、しかも子を生み出す一種の生産用具でもあったからに違いなく、吉野氏も、前掲著書において、女陰の作用につき右の二点を挙げ、その最高の呪物なることを詳説しておられる（八一頁・八四頁）。

以上の考察によって、御伽草子「鉢かづき」の「鉢」は、言語の上から見ても、この物語における、次に記すような種々の神秘的作用を考えても、霊力、呪力のある女陰を象徴していると見ることができ、しかも、作者は露骨に女陰に関しては一切語らず、鉢の霊力をひたすら長谷観音の霊験と結合させようとしたのではないかと思うのである。つまり、「鉢かづき」に見える、「鉢を頭にかずいて変装すること」「鉢が姫の溺死を防ぐこと」「嫁くらべ直前に鉢の自然に落ちること」「落ちた鉢から晴着や宝物の出ること」などの不思議な現象は、すべて長谷観音の示現とか霊験によると見れば、それで一応、読者は納得し、また、作者も長谷観音の霊験を説いたことになるわけであるが、「鉢」の背景をなしているのは実は「女陰」であると考える時、右の不思議な現象は、すべて合理的に説明し得るのである。すなわち、姫が鉢をかずいて変装することは、女陰の持つ霊力・呪力を姫が持つことになり、その力によって、時機到来まで姫は一般の男を近づけず、また、溺死を免れ、ついには宰相の君という、姫にとって幸福をもたらしてくれる、ただ一人の男性との恋愛が実を結ぶのであるが、そういう境遇となれば、もはや鉢による変装は無用となり、おのずから鉢が取れ、しかも、生産用具である女陰としての鉢からは、晴着や宝物が出ることになるのである。なお、宰相の君の訪れを待つ間の姫のつれづれを慰めるため、宰相の君は、「黄楊の枕」と「横笛」を姫に与えるが、その時、宰相の君は「これを見て慰み給へ」（七〇頁、圏点筆者）と言い、その後、姫はこの両品物を、「置くべき所のあらざれば、持ちわづらひてゐ」（七一頁）たという。ところが、「枕」は寝具であるから、姫にとっては、自分と共寝する相手である恋人宰相の君を想うためには重宝なものであり、かつまた、古来、宗教的・呪術的な作用があると信じられ、[六] 姫は、「枕」に宰相の君の生命が宿っていると考えることができたに違いないが、吹奏してこそ意味のある「横笛」は、宰相の君も「吹きて」と言うかわりに「見て」と言い、姫もまた、その後、一度も吹かずに「持ちわづらひてゐ」ただけである。この事実から想像すると、作者はわざわざ、性行為に関係のある寝具としての「枕」、あるいは、宰相の君の生命が宿っている「枕」を取挙げるとともに、それに対し、形態上、男根を連想させるほか、本来、神おろしの楽器として霊力のある「横笛」[七] を取挙げ、宰相の君をして「見て」と言わしめたのではあるまいか。このように、御伽草子「鉢かづき」に、呪的な、そして性的な「枕」とともに、霊力がある一方、男根を象徴する「横笛」が、わざわざ取挙げられていると考えることは、この物語が女陰を象徴する「鉢」をかずく姫の物語であると見なすには、まことに好都合と思われるのである。

## （六）

かくて、御伽草子「鉢かづき」は、女陰を背景にした一種の性的民

間説話であると、私は考えるのであるが、その原拠となったらしい寝屋長者伝説の流布地である寝屋とは、市役所本や御伽草子「鉢かづき」に見える「交野郡」内にあって、現在は行政上、寝屋川市内の一区域に入れられ、寝屋川市東部丘陵地帯にある。寝屋の南の寝屋谷には、星田山を水源とする寝屋川が西流して、大阪市内に至るが、寝屋は丘陵地のため、古来、農作に欠くことのできない水との縁が深く、寝屋神社（大字寝屋字小山一五二五）の摂社に水神の水分神・高龗神が祭られているほか、寝屋の近くにある打上神社（大字打上字上一一、「高良神社」ともいう。）にも摂社に水神の八大竜王が、また、国守神社（国守町一四一六）の若宮にも水神の善女竜王が、それぞれ祭られている。ところで、前述のごとく、鉢は水を入れる神霊の容器でもあり、鉢かづき姫はそれを頭にかずいたまま、山蔭の三位中将のもとで水仕女となって働くが、高崎博士は前掲著書において、

鉢かづき姫の御伽は、山蔭家などの伝承から流布したものであるらしく、それは水の霊威を和むべき家筋であったらしいことは、亀の報恩譚などと共に合はせ考へられる処である。（三七三頁）

と述べられていること、および姫の水仕女となることは、ともに水に縁のあることで、水に不足がちな丘陵地の寝屋部落では、水仕女となることは、女性の大切な仕事であったに違いなく、また、鉢かづき姫を助けた山蔭中将が、幼時、継母のために淀川に突き落とされ、亀の報恩によって蘇生したという伝説に関係ある古刹久修園院が枚方市樟葉（もと、交野郡内）にあり、これらの点からしても、御伽草子「鉢かづき」の原拠を寝屋長者伝説に求めることは、決して不都合ではあるまい。また、「寝屋」の地名がいつごろから用いられたかということや、その名づけられた由来が何であるかについては、吉田東伍博士著「大日本地名辞書」や「寝屋川市誌」にも解説されていないが[18]、元来、「寝」は性交の意に用いられたようであるから[19]、「寝屋」とは、嬢会や歌垣の流れを汲む共同婚の名残りとして、各地に設けられていた「娘宿」[20]とか、団体婚を示す「寝宿」[21]などに類する、若い男女の性的場所を意味する語ではないかと想像される。もっとも、現在の寝屋には、そのことを立証するものは全く見当たらないが、もし、「寝屋」の語が上述のように性的なものであれば、性的民間説話と考えられる御伽草子「鉢かづき」の原拠が、寝屋長者伝説ではないかとする推定は、さらに一層、強化されることになるであろう。

私は、変装用具となった「鉢」の神聖性と「女陰」の神聖性との関連を追究することによって、御伽草子「鉢かづき」の変装趣向とその原拠につき、かなり大胆な考察を試みたが、「鉢」の神聖性は「女陰」とは切り離して、その一部の説明がある程度可能であることを簡単に付言しておこう。それは、信貴山縁起絵巻に描かれた、有名な命蓮の飛鉢で、絵巻の話は、古本説話集や宇治拾遺物語にも見えるが、それは、この聖の鉢が信貴山麓にある長者の倉に飛んで行って、鉢に倉を乗せて山の聖のもとに飛び帰ったが、長者が倉を取り返しに来たので、聖が米一俵を鉢に乗せると、続いて他の米俵が列をなして空を飛び、長者の家に戻って行ったという。このように空を飛ぶ鉢のことを記した文献は、藤田経世氏[22]によれば、三宝絵中巻に、役行者が自分は草座に乗り、母を鉢に乗せて渡唐した、とあるのが最も古く、続本朝往生伝・本朝神仙伝（野村本）・元亨釈書などにも見え、また、続本朝往生伝の著者大江匡房のころには、天台宗に飛鉢の法が伝えられていたらしく、この法力を得るための修行などについて記された飛鉢儀軌・飛空大鉢法などが、写本として現存している由である。とにかく、空を飛ばすのにわざわざ鉢を使用すること自体が、鉢に霊力のあることを示すもので、やはり鉢の神聖性を表わすものと言えるであろう。けれども、飛鉢の「鉢」と、御伽草子「鉢かづき」の「鉢」とは、本質的に全く別のものであるから、飛鉢によって、鉢の神聖性を説明し

得たとしても、御伽草子「鉢かづき」や市役所本における鉢の神聖性とは無関係であり、やはり、私としては前述した女陰の神聖性との関連を無視することができないのである。

要するに鉢をかずくことによる姫の変装とは、単に姫の身体の一部を、鉢という仮面を用いて姫の美しい顔を隠すにすぎないけれども、寝屋長者伝説を基とし、その変装用具としての鉢に霊力を持たしめて姫を救い、それをすべて長谷観音の霊験であると説いて、物語を構成したのが、現在流布する御伽草子「鉢かづき」であると考えられる。しかも、女陰の神聖性をあくまでも物語の表面に露呈させず、それを鉢の神聖性にすり替えて、観音霊験説話として組み立てた、この物語における変装こそ、まさに中世的と言い得るのではあるまいか。

## 注

（一）室松岩雄氏校訂「随筆珍本　鹽尻　上巻　百巻本」（帝国書院刊）を使用する。

（二）右の引用文中の「河州紀」は、「国書総目録」にも見えない。

（三）前掲「塩尻」の「序」によると、天野信景は、寛文元年（一六六一）、名古屋に生まれ、享保十八年（一七三三）に七十三歳で病没した。

（四）九八・九九頁。なお、市古博士は、右の「塩尻」の替りに「嬉遊笑覧」の書名をあげておられる。

（五）「民間説話系の室町時代物語―『鉢かづき』『伊豆箱根の本地』他―」（「斯道文庫論集」第七輯、昭和四十四年十月）。

（六）以下、「市役所本」と呼称する。

（七）「斯道文庫論集」第三輯、昭和三十九年三月。

（八）「」は行の終末を示すため、便宜上、私の施したものである。また、「行平」の下に花押がある。なお、この歌は新後撰集巻十三恋三の一〇二一番の歌と一致し、それによると、詠者は「行平」ではなく「大江頼重」となっている。

（九）日本古典文学大系「御伽草子」所収「鉢かづき」五九頁。以下「鉢かづき」は本書を使用する。

（一〇）野村博士著「室町時代小説論」三〇九頁。清水泰博士（「日本文学論考」一一二・一一三頁）は、野村博士説を紹介され、別に、紫波郡（岩手県）昔話「化物寺」に見える、鍋をかぶっていたために命の助かった旅僧のことにも触れておられるが、結局、「紫波郡昔話の中には、今昔物語集や、宇治拾遺（拾カ）物語などの話もあるので、この鍋をかぶった話も、鉢かづきなどよりも古くからつたわっていたものかも知れぬが、鉢かづきとの因果関係を述べることには躊躇される。」と述べられた。

（一一）「古代研究」所収「河童の話」。

（一二）日本古典文学大系「古今著聞集」四二七・四二八頁。

（一三）日本古典文学大系「古代歌謡集」所収「催馬楽」の「陰（くは）の名（な）」には「つらたり」とある。

（一四）以上のほか、安田徳太郎博士著「人間の歴史　3　女の全盛時代」（五五頁―五九頁）にも、性語に関して示唆される記事が見える。

（一五）安田博士著「人間の歴史　4　光は東方から」二七四頁、拙稿「子どもの罵言」（「民間伝承」昭和三十一年十月号）。

（一六）西村亨氏著「王朝恋詞の研究」の「第六章　習俗の諸相」の「まくら――寝具以前と以後と――」。

（一七）柳田国男氏監修「民俗学辞典」の「笛」の項。

（一八）寺前治一氏著「寝屋川史話一〇〇題」には、古代生駒山系の麓一帯は牧場が栄え、その従事者の共同的な宿泊所が「寝屋」であって、現在の寝屋川市東部丘陵も、当時、牧場区域に入り、その「寝屋」があったらしいところから地名の「寝屋」が起った、という解説がある（一七三・一七四頁）。

（一九）中山太郎氏著「日本婚姻史」二六・二七頁。

（二〇）「注・九」の著書四八頁。

（二一）「注一九」の著書一四八頁―一五三頁。

（二二）秋山光和氏との共著「信貴山縁起絵巻」所収「ものがたりのなりたち」の「鉢・倉・山崎」。

（二三）「観音」を「女陰」の異称とすることは、「日本国語大辞典」にも記され、性的民間説話と考えられる御伽草子「鉢かづき」に観音信仰が説いてあるのは、結局、女陰信仰を暗示しているのではないかという、考え方も成立するかも知れないが、「観音」が「女陰」の異称として使用された時代は、右の「日本国語大辞典」の用例よりして、明治以後のことと考えられるから、単に言語の上からは、「鉢かづき」の観音信仰を直接に女陰信仰に結びつけることに賛成できない。しかし、前にも触れたように、元来、鉢かづき姫は長谷観音への申し子として誕生したのであって、西郷信綱氏著「古代人と夢」に、「古代人の考えでは子を授かるのは子種を授かることであり、穀物の種がみのるのと子が生れるのと、つまり大地の生産力と女の性的生産力とは、たがいに包みあう関係にあると見なされていた。そういう由緒をもつ申し子説話を観音がほとんど一手に引き受けているのが、偶然であるはずはなかろう。」（一一〇・一一一頁）とあることを考慮すると、たとえ明治以前にはまだ「観音」が「女陰」の異称として用いられていなかったとしても、やはり、「鉢かづき」における観音信仰と女陰信仰との結びつきは、全くなかったとは断言できないように思う。

付記――本稿は、昭和四十九年十一月、枚方市立枚方第二小学校ＰＴＡ講演会において、「古典童話とその原典」と題する講話を行なった時の覚書を基として、新たに書き下ろしたものである。なお、市役所本の調査・閲覧に際しては、寝屋川市教育委員会の寺前治一氏をはじめ関係職員各位に、何かとお世話を蒙った。ここに記して感謝の意を表する。

# The Idea of a Disguise and the Origin in OTOGI ZŌSHI "HACHIKAZUKI"

Hiromichi SUZUKI

**Summary**

One of the books in manuscript which seemed to be similar of the legend which had become the origin of OTOGI ZŌSHI "HACHIKAZUKI" is kept in Neyagawa City Hall. When we consider the contents and the postscript, we can predicate that this book is the same form of the original legend. But at least, it seems that the basis of the contents of the legend makes no great difference from this SHIYAKU-SHO-BON (a book of N. City Hall). Next, the bowl which was used as the disguise goods for heroine in HACHIKAZUKI or SHIYAKUSHO-BON was once the thing for divine spirit to dwell, as well as a plate, a pot or a jar. And it also seems to have been a symbol of "women's pubes" in the other means. Women's pubes is traditionally believed to have the spiritual power or mana. A lot of unacountable phenomena which are related to "the bowl" in many stories can be logically solved by considering the spiritual power or mana of the women's pubes. But I think the author of "HACHIKAZUKI" doesn't write about women's pubes at all. I think the author earnestly tried to unite the spiritual power of the bowl with the miracle of HASE AVALOKITÉSVARA.

Accordingly we can say "HACHIKAZUKI" is a kind of a sexual folk story with women's pubes as its setting. And we can also imagine that the origin is probably NEYA-NO-CHŌJA legend from the geographical point of view of Neya region.